

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02466

研究課題名（和文）世界文学におけるカニバリズム言説の研究

研究課題名（英文）The Discourse of Cannibalism in Western Literature

研究代表者

本橋 哲也（Motohashi, Tetsuya）

東京経済大学・コミュニケーション学部・教授

研究者番号：20230047

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：「食人種」にたいする差別幻想を主軸とするカニバリズム言説が西洋近代世界において果たしてきた役割について、おもに西洋文学を題材として分析することによって、現代社会においてもさまざまな場所で発言している「野蛮の言説」や人種、ジェンダー、階級等を横断する差別の力学について検討した。このような研究は単に文学や芸術テキストの読解に留まることなく、私たち自身の社会がいまだに「文明と野蛮」「西洋とそのほか」といった二項対立思考に基づいている事を明らかにすることによって、より平等な世界への思考を誘発すると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「食人種」の存在を仮定したカニバリズム言説は、西洋的近代世界が植民地獲得と支配のために生産してきた特殊な時代の産物であるが、それは時代を超えて、さまざまな差別や暴力の思想的源泉ともなってきた。よって、そうした言説が発生するメカニズムを文学や芸術の表象から分析する事は、私たち自身の社会がいまだに温存している差別や支配の力学を省察し、そこから脱出するための鍵となる。文学や芸術は人びとが自分たちの周囲の世界をどのように観察し構想しているかの鏡ともなっているからである。

研究成果の概要（英文）：This study analyses the roles of the discourses of cannibalism which is based on the Western discovery of "ferocious man-eaters" during the colonial domination by the European countries of the rest of the world particularly since the end of 15th century. Through these studies, we would be able to understand better the mechanism of the binary thinking between self and other, enlightened and savage, and hopefully lead to a vision of more equal world.

研究分野：西洋思想史

キーワード：カニバリズム言説 西洋文学 植民地主義 野蛮の言説 西洋近代世界

## 1. 研究開始当初の背景

本研究開始の背景としては、自己と他者との二項対立および第三項排除が言説的支配関係における標準形をなすという議論（今村仁司『排除の構造 力の一般経済序説』、赤坂憲雄『異人論序説』、アロン・ホワイト、ピーター・ストリラス『境界侵犯その詩学と政治学』）をカニバリズムの研究から深めるという視点が重要であった。

たとえば近代の西洋の植民地主義において普遍的に見出される白人男性 / 先住民女性 / 先住民男性という図式は、文明化された白人男性が野蛮な先住民男性の支配から無垢な先住民女性を救済するというかたちで植民地主義的な支配の幻想をかきたててきた。そのような言説における「他者」のステレオタイプは、優越項と劣等項との組み合わせによって形成されるが、ステレオタイプは必ずしも一元的ではなく、ステレオタイプそのものが矛盾や両面価値性を抱え込んでおり、そのことはカニバリズム言説の生産と流通についても言える。カニバリズム言説の探求をとおして、自己認識と他者表象の普遍的な理論モデルの構築の一助となることが本研究の目的であり、本研究課題の独創性と学術的な貢献もその点にあったと言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、西洋思想史のなかで重要な位置を占めている他者表象言説のうち、他者の言説的支配をとおした自己のアイデンティティ構築という観点から特に興味深いと思われる「カニバリズム」言説が世界の文学や視覚表象のなかでどのように存在しているかの起源と系譜について、ギリシャ時代の古典文学から中世の旅行記、植民地征服時代の政治文書、近代および現代文学にいたるまで、ひろく題材を求めながら探求することにある。その際の学問的参照項としてとくに注目したのが、1492年のクリストファー・コロンブスによる「新大陸の発見」以降の西洋による太世界の植民地征服の中で、他者を周縁化し劣等で野蛮と見なす原因とも結果ともなった「食人種との遭遇」を記述するカニバリズム言説である。西洋が他世界と遭遇したときに生み出された他者表象の中核をなすカニバリズム言説を、さまざまな旅行記や文学・演劇・映画を題材として分析することにより、この研究は現代の人文学における自己認識と他者表象にかかわる言説構築のための理論的および実践的視野を拡張することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では上記のような関心に基づき、合計4年間の研究期間でギリシャ古典時代から現代までなるべく広範に世界の食人言説を検討した。「食人種」にたいする差別幻想を主軸とするカニバリズム言説が西洋近代世界において果たしてきた役割について、おもに西洋文学を題材として分析することは、現代社会においても、政治や宗教、思想、文芸、スポーツ、エンターテインメント産業といったメディアを横断して、さまざまな場所で構築され続けている「野蛮」の言説や人種、ジェンダー、階級等を横断する差別の力学について検討することに繋がった。よって、この研究は単に文学や芸術テクストの読解に留まることなく、私たち自身の社会がいまだに「文明と野蛮」「西洋とその他」といった二項対立思考に基づいている事を明らかにすることを、方法論的な基礎としてきた。

そのような視点から、研究開始当初にはそれほど焦点化されてはいなかったが、カニバリズム言説をめぐって、新しい人類学の動向、とくに可食性や捕食に関する人類学に注目するようになった。海外ではヴィヴェイロス・デ・カストロの著作がもっとも有名だが、日本でも雑賀恵子『空腹について』、同『エコ・ロゴス』、赤坂憲雄『性食考』といった著作が、食べることと存在することの基本的なつながりを探求して、世界の文学や映像表象におけるカニバリズム言説の意義について新しい視点を提供する端緒となった。

たしかに一方で「食人種」の实在を仮定したカニバリズム言説は、西洋的近代世界が植民地獲得と支配のために生産してきた特殊な時代の産物であるが、それは他方で時代を超えて、さまざまな差別や暴力の思想的源泉ともなってきた事実を否定できない。よって、そうした言説が発生するメカニズムを文学や芸術の表象から分析する事は、私たち自身の社会がいまだに温存している差別や支配の力学を省察し、そこから脱出するための鍵となる。本研究はつねにこのような関心に基づきながら、文学や芸術を単なるテクストとして分析するだけでなく、広い意味での文化表象、すなわち人間が時代や地域の特異性に囚われながらも、自身の文化を再創造し革新してきた証として解釈する方法を採用してきた。

## 4. 研究成果

本研究の成果の一つとして、西洋の思想史におけるカニバリズム言説の歴史は、およそ次の四つの時期に分けられる事が判明した。第一期は古代ギリシャから中世までで、ヘロドトスやマンデヴィル、マルコ・ポーロといった作家が有名だが、食人が理解不能な他者の習慣として描かれ

ており、そのような怪物的存在は自己の共同体の外部を示すために必要なだけで、実在を証明する必要はなかった。食人を示す用語も「人を食べる人」を文字通り意味する「アンソロポファジャー」に過ぎず、自己と他者との関係の変容とは無縁であった。

第二期の西洋植民地主義の時代になると、コロンブスがたまたま耳にしたと言われる「カニバルス」という音から「食人種」が実体化されたように、植民者が発明した書記言語による被植民者の悪魔化・周縁化・奴隷化の手段として、カニバル記号が伝播していく。この傾向はアメリカ新大陸から太平洋の島々、オーストラリア、東南アジア、アフリカにまで植民地支配とともに拡充してゆき、モンテニューやスウィフト、サドといった稀有な文化相対主義者も少数存在してはいたが、コロニアルな言説の権力的布置が自己を正当化し、他者を周縁化するヘゲモニックで一方的なベクトルのもとに、植民地支配が免罪される契機が作られていく。この時期の特徴は言説による実体の周縁化にあり、植民地主義者たちは自らの暴力的支配を正当化するためにカニバリズム言説を多用した。しかし同時に、伝聞でしか知らないが、宣教師とか航海者と貿易商人といった仲介者を通じて接触した境界線上の他者に対する魅力と恐れが入り混じった表象や幻想としての文学的創造の可能性をもカニバリズム言説は孕んでもいた。ヨーロッパの植民地主義勢力が支配を世界に拡大していく中で、ほぼ同様のモデルにしたがってカニバリズム言説も波及していくが、その歴史的経緯を辿っていくと、ある特定の自己と他者の遭遇の初期にだけ、港町とか山間の村といったコンタクトゾーンにおいて、カニバリズム言説が噴出し、それが商業関係や植民地支配において自他の関係が安定すると、消滅していく傾向がどこでも見られた。つまりカニバリズム言説は、実体不明の他者に対する魅惑と恐怖と忌避と差別を含んだ記号的操作の産物であって、コンタクトゾーンにおける自他の関係の微妙なバランスと力学において増殖する、特異な表象体系なのである。

第三期は二〇世紀のポストコロニアル時代における人類学の修正主義的な知の積み重ねによって、以前のヨーロッパ中心主義的なカニバリズム言説の歪みが検証され訂正されていった。ウィリアム・アレンズやガナナス・オベイセーカラといった学者たちの研究によって、先住民による食人慣行に疑問が投げかけられ、ここでベクトルの方向はコロニアリズムの時代とは逆に、ヨーロッパ中心主義が暴かれていくことになった。しかしながら、自己と他者、ヨーロッパと非ヨーロッパという関係そのものは温存されていたわけで、このポストコロニアルな読み直しは確かに重要な修正をもたらしたといえる一方で、食人儀礼が存在しなければ先住民は善良で植民者が悪い、という想定にこだわるあまり、コンタクトゾーンにおける自己と他者の相互変容というモーメントを無視した傾向は否めない。植民地主義への自己反省に基づくポストコロニアルなカニバリズム言説の見直しは、食人という営みの表象的重要性、記号としての文化的意義に他者の自律性を感得することをせず、結局のところ、カニバリズム言説におけるヨーロッパの優位性というヘゲモニーを温存したのである。

第四期になると、表象の重要性に焦点が当てられ、幻影によって生み出される自己と他者関係の変容が焦点となる。人間と動物とを区別せず、あらゆるモノ自体の自律性に注目するという、先住民の思考の根幹に着目しながら、ヨーロッパ人の残した食人儀礼の記録が読み直されていく。これが最近の人類学における「存在論的転回」と呼ばれる学問動向と関わって、カニバリズム言説の新たな可能性を開くことになる。たとえばヴィヴェイロス・デ・カストロは自らの学問的態度を「多自然主義」と呼ぶが、それは人間中心の世界観を超越した地平で複雑な自然世界を構想し、そのなかで人間自体の自然性を考えようとする。このような現代の人類学は「新しい唯物論」や「思弁的実在論」といった現代哲学の新潮流とも関わって、一九世紀に成立した帝国主義的な人類学とも、ポストコロニアリズムによる表象の力学批判を踏まえた再帰的な人類学とも異なり、そうした学問の中核にあった人間の特権性を見直し、モノ自体をエージェントと捉える態度に基づく点で、現代におけるカニバリズム言説の再評価を牽引している。動植物や精霊や無生物を人間と同格の存在と見なすアニミズムや多自然主義によれば、人間にとって敵対関係にある危険な存在は人間社会と両立困難な形で対立しており、それゆえ自然は「一」ではなく「多」であるとされる。デ・カストロが論じるカニバリズムは、自然の身体としての人格である肉を食するという行為において、自然と文化の境界線に位置するものである。食人は「敵」という根源的な他者に対する復讐であると同時に信頼であり、人間だけでなく動物や死者、モノにまでいたる多元的な世界における非ヨーロッパ的で双方向的な「アンチ・ナルシス」の思考を導き出すとされるのである。

このようなカニバリズム言説の再評価を基にして、各年度の成果報告で記したように、すでに何本かの研究論文と、一冊の翻訳書を刊行したが、現在、研究成果の一つとして単著の執筆を進めつつある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 64
2. 論文標題 暴力を舞台表象するとはどういうことか？ 二〇一九年利賀村シアター・オリンピックスにおける三作品から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際演劇批評家協会日本支部『シアターアーツ』	6. 最初と最後の頁 85,92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 58
2. 論文標題 The Lost Youth, Homelessness and Dystopic Vision in Yamanote-Jijosha 's King U-Lear-Shimataro	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本シェイクスピア協会『Shakespeare Studies』	6. 最初と最後の頁 38,41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 51
2. 論文標題 「待つ」という絶望 / 希望 1990年代以降の鈴木忠志の演劇実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京経済大学『コミュニケーション科学』	6. 最初と最後の頁 73,83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 144
2. 論文標題 信頼と危険の詩学 - ル・グイン、魔術、カニバリズム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京経済大学『人文自然科学論集』	6. 最初と最後の頁 61, 83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 30
2. 論文標題 「「愛し合う」という闘い 宮城聰『冬物語』『アンティゴネ』における人間の限界」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会評論社『変革のアソシエ』	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 62
2. 論文標題 鎮魂から祝祭へ 『オセロー~夢幻の愛』における物語の十三回忌/回帰	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際演劇批評家協会日本支部『シアターアーツ』	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 2018
2. 論文標題 信頼と真実の政治学 2017年英国劇団回顧	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『国際演劇年鑑』	6. 最初と最後の頁 97-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 139
2. 論文標題 「カニバリズム、野蛮人、海賊 レベッカ・ウィーバー=ハイタワー『帝国の島々 漂着者、食人種、征服幻想』における植民地主義のトポス」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『東京経済大学人文自然科学論集』	6. 最初と最後の頁 113-128頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本橋哲也	4. 巻 2016
2. 論文標題 「メランコリーからの脱出 人種、難民、ナショナル・アイデンティティ 2016年英国劇壇回顧」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際演劇協会日本センター 『国際演劇年鑑2017 THEATER YEARBOOK 2017 Theatre Abroad 世界の舞台芸術を知る』	6. 最初と最後の頁 78～85頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 本橋哲也
2. 発表標題 ル・グイン、魔術、カニバリズム
3. 学会等名 日本英文学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tetsuya Motohashi
2. 発表標題 Poetics of Risk and Trust in Shakespeare's "Othello"
3. 学会等名 Trust and Risk in Literature International Academic Network (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本橋哲也
2. 発表標題 『エレクトラ』における狂気の表象
3. 学会等名 「文学における信頼と危機」国際ネットワーク (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 本橋哲也
2. 発表標題 人類学と南米のカニバリズム言説
3. 学会等名 「文学における信頼と危機」国際ネットワーク（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 レベッカ・ウィバー＝ハイタワー著、本橋哲也訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 402
3. 書名 『帝国の島々 漂着者、食人種、征服幻想』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----